

GLOBE Voice

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies 2012 Number 6

東京外国語大学





特集

ここから始める未来

言語文化学部と国際社会学部がスタートして半年が過ぎた。学内では、外国語学部の学生と新入生とで新たな賑わいをみせている。初夏のある一日、東外大の“いま”をつくる、学生の表情と声を集めた。彼ら、彼女らは、将来、どんな自分に出会うのだろう。

文・グローブヴォイス編集室
写真・公文健太郎

今日の
自分が
明日の
世界を
つくる。



ガリ勉タイプが多いと
思っていたけど、
勉強プラスαで
好きなことをしている人が
たくさんいます！



勉強するには
最高の環境です。
いろんな国の人と出会い、
世界が広がりました。
夢は会議通訳者。



周りの人が
よく勉強するので、
つられて勉強するようにな
りました(笑)。
教員を目指しています。



2年になり
ベトナム語に加えて、
中国語とスペイン語、
トルコ語にも
取り組んでいます。



留学生と
知り合いになり、
世界が広がりました。
夢はジャズミュージシャンに
なること。



同じクラスの人と
4年間一緒に過ごすので
絆が深まります。
将来は国際金融の
仕事に就きたい。



案外普通の人ばかりで
物足りない！
でも8カ国語
話せるようになりました！



自由にできる大学。
自分のスタイルを
大切にしている人が
多い印象です。



やさしい人が多く、
自由にのびのび
振る舞えます。
ジャーナリストに
なりたいです。



変な人と
普通の人が
二極化している印象。



日露のハーフですが、
ロシア語が使えないので
勉強中です。
夢はアナウンサー。



少数なので
つながりが深い！
楽しい！
外交官を目指し
猛勉強中です。



わが道をいく大学。
流行に流されない人が
多いと思います。
この感じ好きです。



2010年春に広報誌を創刊しました。タイトルは「GLOBE Voice」。「地球」と「声(=人)」という2つの言葉を合わせた造語です。東外大の使命は、「地球をつなぐ声」を発することができる人材を育てること。そのためには、さまざまな国の文化・歴史といった、背景を知ることが欠かせません。6号目となる今号は、今年4月からスタートした、言語文化学部と国際社会学部の教員からのメッセージと、新旧混合の東外大生の“いま”をお伝えします。

Contents

今日の自分が
明日の世界をつくる。——3

学長対談 ——10
作家 島田雅彦氏

graduated active person
in society ——16
立命館大学 講師 中川亮平
日本政策投資銀行
プリンシパル投資担当 當間玉規

person doing research ——18
益子幸江／青山弘之／宮城徹

コラム「聴」 ——24
関口時正／工藤嘉名子／菅原睦

歴史を刻む在学生 ——28
外国語学部3年 加園千尋

News ——30



男女比3:7?
女性のパワーにあふれています。
クラスのメンバーはみんな仲良しです。



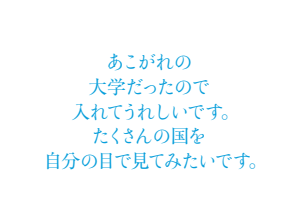
大学生活6年目。
留学や休学に抵抗がなくなります。
枠にハマらず、自由に生きられる大学です。



日本だけど日本っぽくない雰囲気がいい!
行動力が身について、考え方の幅が広がりました。



変わり者が多いので浮かなくてうれしい(笑)。
周りに流されず、自由に生きていきたいです。



あこがれの大学だったので入れてうれしいです。
たくさんの国を自分の目で見てみたいです。



海外や異文化への抵抗がなくなり、行動範囲が広がりました。
目標は20代で世界一周!



外語祭がめっちゃ楽しい。
世界の文化と料理を楽しめるので遊びに来てください。



オープンマインドな人が多いと思います。
将来はメキシコに住みたいです。



ほかの大学で学べないことが学べると思います。
吸収したいことには食欲にいきます。



「外」とつながる大学では、日本で最高の大学と思っています。
夢はミュージシャン。



大学に入ってから、「ことば」に対する興味が一段と強くなりました。
方言について研究したい。



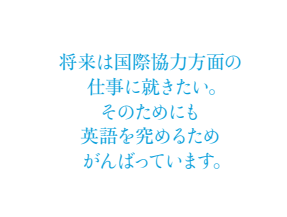
キャンパスは例えれば“小さな世界”。
将来は、世界に必要なとされる仕事がしたいです。



さまざまな価値観やものの見方にふれているうちに、日本を客観的に見られるようになりました。



ほかの大学で学べないことが学べると思います。
吸収したいことには食欲にいきます。



将来は国際協力方面の仕事に就きたい。
そのために英語を究めるためがんばっています。



ボランティアで外国にルーツを持つ子どもへの教育支援(授業中の通訳など)をしています。



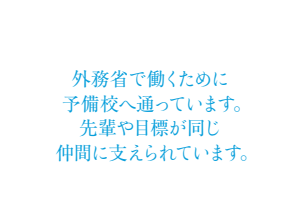
語学を究めるもよし、旅行するのもよし、サッカー部に入るのもよし(笑)。
悩む前に行動です。



就職活動のための大学生活は嫌。
自分がやりたいこと、好きなことに時間を使っています。



さまざまな価値観やものの見方にふれているうちに、日本を客観的に見られるようになりました。



外務省で働くために予備校へ通っています。
先輩や目標が同じ仲間を支えられています。



人との出会いも、思い出も、自分から動いて初めて手にできると実感しています。



在学中に専攻語のスピーチコンテストで優勝してみせます!



国際関係に興味を持って入学しましたが、今はロシア文学に夢中です。



外語祭の語劇で“演じること”にハマりました。
舞台女優を目指しています。



学生生活の過ごし方に“正解”はない。
未来の自分だけがそれを知っているのだ。



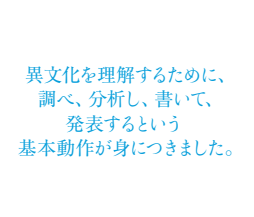
多様なものを受け入れる心と頭の柔軟性が身につきました。
好奇心、探究心は尽きることがありません。



正しい日本語を使い、日本の歴史や文化について知識があること。
それが国際人への第一歩です。



朝鮮語を通じて、自然と日本語でも正しい敬語が使えるようになり、礼儀作法も身につきました。



異文化を理解するために、調べ、分析し、書いて、発表するという基本動作が身につきました。



外語祭の語劇や料理店、課題や試験にともに取り組むことで、専攻内に強い団結力が生まれました。



「情報」では得られない現場の「匂い」を感じたい!
五感を使って世界を知りたい。



4年生になったら1年休学し、海外の企業でインターンシップをしようと思っています。



英語教師を目指して塾講師のアルバイトをしながら、教育現場を学んでいます。



東 京外国語大学に入ると、何ができるのだろうか、何を学び、どのような出会いが待っているのか。そして、将来はどんな自分になっているのか――。



チェコの絵本や雑貨が好きなので、文化外交を勉強して、海外と日本の芸術交流を支えたい。



ブラジルから来た研究生です。
日本語を勉強して、村上春樹の小説を翻訳するのが夢です。



カリキュラムには豊富なメニューが揃っているが、何を学ぶかは自分次第。大学の講義だけでなく、就職を意識して資格取得に向かう人もいるだろうし、大学院を目指して高度な研究を究める人もいるだろう。さらには、教室では学べないことを求めて留学や課外活動に精を出す人もいるかもしれない。多くの人が指摘することだが、大学時代の一日一日は、未来の自分

自分の可能性を探す 知的冒険の旅へ

の骨となり肉となる大切な時間だ。2012年4月、東外大では「言語文化学部」と「国際社会学部」がスタートし、第一期生が誕生した。学生たちは日ごろ、どのような意識でキャンパスライフを送っているのか。初夏のある晴れた日、学内で学生たちに大学生活で感じることや将来の夢などを聞いた。

「東外大を一言で言う」という問いで一番多かった答えが「変な(おもしろい)人が多い大学」。同じく「入学してから成長した点は」、「という問いには、「ものの見方、価値観が広がった」という答えが多かった。これは2年生以上の学生だけではなく、新入生にも多くみられた。全地球をカバーする、世界14地域・27言語の教育体制を備えた、東外大独自のユニー

クスだからこその特徴と言える。学部や専攻語、専攻地域は広い学びの世界への「入り口」。ここから新しい自分を発見する旅が始まるのだ。大学の4年間は、人生の中でも自由で可能性に満ちあふれている。自分に隠された力を発見すること、友達を作ること、一人の時間を過ごすこと。この時間を最大限に利用して、好奇心と個性を大切に、自らの可能性を探してみよう。

次ページからは、新設地域・言語の設置意義や新設学部の学部長、外国語学部生から、東外大ならではの学びの魅力を聞いた。▼

新設地域

中央アジア

重層し複合しながら
独自の歴史と文化を育む

小松久男 特任教授

(大学院総合国際学研究院 国際社会部門)

Q1 「中央アジア」地域の地理的な範囲と、その文化的な伝統、また日本との関係について教えてください。

今日、中央アジアとは、1991年にソ連から独立したウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタンの5カ国を指します。古来草原の遊牧民とオアシスの定住民が対立、交流する中で育まれた文化には、トルコおよびイラン的な要素がまじりあい、これにイスラームがまじりを与えてきました。さらに19世紀以降、ロシア帝国ついでソ連の中に組み込まれた結果、ロシア的な要素が加わり、およそ70年のソ連時代には社会主義の文化が浸透しました。このように中央アジアの文化は、重層し複合するところに特徴があり、新しく独立した国々は、文化的な伝統の再定義に努めています。

中央アジアと日本はかつてシルクロードで結ばれ、独立後の発展に日本は大きく貢献しました。この地域の資源と安定は現代の日本にとっても重要な意味を持っています。

Q2 中央アジアを理解するためには、どのような言語を習得する必要がありますのでしょうか。

まず現地ですべての言語を習得することが必要です。大きく分けて、民族語と共通語としてのロシア語があります。民族語にはトルコ系のウズベク語、カザフ語、キルギス語、トルクメン語とイラン系でペルシア語に近いタジク語がありますが、文章語として長い伝統を持っているのは、ウズベク語とタジク語で、ウズベク語は中央アジアで最大の話者を有しています。

一方、ロシア語は特にソ連時代に共通語として定着し、ソ連解体後もその地位は変わらず、ロシア連邦との関係が強まるとともに、現地でのロシア語教育にも力が入っています。またロシア帝国以来、中央アジアに関する研究・調査の成果は、主にロシア語で蓄積されてきました。こうしたことから、新設の中央アジア専攻では、ロシア語とウズベク語を必修としています。

質問者 鈴木義一 教授
(大学院総合国際学研究院 国際社会部門)

新設地域

オセアニア

多様に広がり発達する
言語・文化・社会

栗田博之 教授

(大学院総合国際学研究院 言語文化部門)

Q1 オセアニアという広大な地域が含まれると思いますが、地域区分と簡単な社会・文化的特徴を教えてください。

オセアニアは、大きくオーストラリア、メラネシア、ミクロネシア、ポリネシアの4つの地域に区分されます。オーストラリアとメラネシアに人類が移住したのは今から約5万年前のことですが、数千年前に東南アジアからオーストロネシア系の人々がメラネシア、ミクロネシア、ポリネシアの島々に移住するまで、太平洋の島々はほとんどが無人島でした。最初の移住者たちを先祖に持つオーストラリア・アボリジニの人々は長い間狩猟採集生活を送っていましたが、ニューギニア島とその周辺の島々に暮らすパプア系の人々は独自に農耕の技術を発明し、焼畑移動農耕生活を送ってきました。そして、優れた航海術を用いて太平洋に広がったオーストロネシア系の人々は根菜農耕とブタ飼育の技術を基盤に首長制社会を発達させてきました。

Q2 東外大では、どのような角度からオセアニアを学ぶことができますか。

オセアニアではさまざまな現地語が使われています。オーストラリアにはアボリジニ

諸語が200以上、パプアニューギニアにはパプア諸語が700以上存在します。また、メラネシア、ミクロネシア、ポリネシアではオーストロネシア語族に属する言語が使われています。19世紀に入り、オセアニアの植民地化が本格化すると、宗主国の言語として英語やフランス語が広まっています。現地語の学習は難しいかもしれませんが、英語やフランス語を用いてオセアニアの地域研究を進めることができます。

Q3 オセアニアにかかわっていくことの魅力は何でしょうか。

海洋世界のため外部世界との接触が少なく、世界史に登場するのが遅れた分、人々は独自の言語・文化・社会を発達させており、その多様性にふれることができるのがオセアニア研究の魅力でしょう。

質問者 土佐桂子 教授
(大学院総合国際学研究院 国際社会部門)

新設地域

アフリカ

多民族共生・
多文化共存の社会

島田周平 特任教授

(大学院総合国際学研究院 国際社会部門)

Q1 これまでアフリカ地域研究を進めてこられたご自身の背景をお聞かせいただけますか。

大学では理学部で地理学を専攻し、卒業後アジア経済研究所でアフリカ研究を始めました。後に大学に移り文系と理系の間を行き来しましたが、一貫してアフリカの地域研究を行ってきました。最後に居たのは京都大学です。京都大学はアフリカ地域研究の世界的拠点の一つです。自然科学と人文・社会科学との総合化を目指す研究としても有名で、恵まれた研究環境でした。その経験を本学の教育に生かしたいと思っています。

Q2 アフリカが抱える課題はどのようなものでしょうか。

アフリカ諸国は、東西冷戦体制の崩壊とグローバル化の進展により、大きな変容を遂げてきました。1994年の南アのアパルトヘイトの撤廃後、各地で一党独裁体制が崩壊しました。と同時に、各地で地域紛争が起きました。また、グローバル化の進展は、鉱産資源が多いアフリカに思わぬ経済的「好機」をもたらし、近年アフリカ諸国のGNPの伸び率



が先進諸国のそれを上回っています。新しい課題が希望と緇い合わさるように出てきています。そしてアフリカ諸国は、新たな国家像の模索も迫られていると言えます。

Q3 これからの世代への教育についてどのようにお考えですか。

アフリカを学ぶことを通して世界を見る眼を養ってほしい。アフリカを、開発と援助の対象として見るのではなく、多民族共生・多文化共存の社会として敬意を払いつつその「内側から」学ぶことを経験してほしいと思っています。

来年横浜で、アフリカ開発会議(TICAD V)が開かれます。この国際フォーラムは、「アフリカ自身の自立」の深化と「国際社会の共生」の重要性を認識した上で、アフリカの開発を考えようというものです。この種の会議への参加を通して、アフリカから見た新しい世界を構想する眼を養ってほしいと思っています。

質問者 坂井真紀子 特任講師
(大学院総合国際学研究院 国際社会部門)

新設言語

ベンガル

推定話者人口
2億5000万人の言語

丹羽京子 講師

(大学院総合国際学研究院 言語文化部門)

Q1 今回の時代に、日本初のベンガル語専攻が開設されたことに、どんな意義があるとお考えですか。

ベンガル語を国語とするバングラデシュが独立を果たしてから、すでに40年が経過し、その意味ではやっという感があるのですが、一方で世界的にもベンガル語を専攻できる大学はそれほどありません。ベンガル語はインド国内でも州公用語として使われていますし、近年この地域は日本でも注目されてきていますので、この言語を学ぶことによってさまざまな分野での活躍が期待できると思います。また南アジアは全体として複合的な文化を持っていますので、本学ならではのシステムでより深くこの地域を理解することもできるようになるでしょう。

Q2 ベンガルといえど、バタールが有名ですが、ベンガル文化を育む自然や人々について教えてください。

ベンガル地域的大部分は大河のデルタ地帯で、また高温多湿でもあります。つまりベンガルは河と雨に

よって象徴され、タゴールをはじめとする詩人の多くがしばしば河と雨を詠っています。タゴールはもちろん突出した存在ですが、こうした詩人を生み出した文化や人々も忘れることはできません。また、タゴールの後にも、それを乗り越えようとして多くの優れた詩人や作家が生まれ、それが現在につながっていると言えると思います。

Q3 ベンガル語の魅力と併せて、ご自身の抱負もお聞かせください。

私は文学が専門ですから、なんといってもその文学の豊かさが魅力です。特に韻文の豊かさは際立っていて、それだけに音を大切に作る創作スタイルにひかれます。本学でやると本格的に原語でそれを読むことができる学生が生まれていくことで、日本における研究や翻訳が発展することを期待しています。ベンガル文学は日本ではまだまだ多くの読者を獲得しているとは言えませんが、学生のみならず一人でも多くの人にベンガル文学にふれてもらい、批評や研究の場が広がっていくように努力したいと思っています。

質問者 水野善文 教授
(大学院総合国際学研究院 言語文化部門)

注・1913年にノーベル文学賞を受賞

2

岩橋立朗

スペイン語専攻4年



語学以上に大切なことを留学で学んだ

スペイン語専攻で、フライングデイスク（フリスビー）部の部長を務める岩橋立朗さん。東日本大震災の第一報を聞いたのは、留学先のバルセロナでのことだった……。

Tatsuro Iwahashi
1989年愛知県生まれ。2008年東京外国語大学スペイン語専攻に入学。2010年9月12011年8月スペイン・バルセロナのポンベウ・ファブラ大学に留学。滞在中にサンチャゴ・デ・コンポステラ巡礼を敢行し、27日間で800kmを踏破した。体育会のフライングデイスク部部長。

えられるので、可能性は無限大と感じます。一番よくないのは、何も考えずに4年間ブラブラ過ごすこと。部活でも勉強でもバイトでもいいから、志を持って、何か一つのことに取り組んでほしい。何が正解かは一人ひとり違いますから」

は50社に絞ってエントリーシートを提出。企業研究からOB訪問まで、「これで落ちても悔いはない」と思えるだけの努力を重ね、見事、第一志望の国際協力機構（JICA）の内定を勝ち取った。「東外大ではさまざまな機会が与

旅先などで出会った人々との交流と、3・11の震災時の体験。それらは岩橋さんに、「世界の中で生きる日本人」としての自覚をもたらしした。「日本と世界がWin-Winになれる仕事が見たい」そう思うようになり、就職活動

大学

やスポーツ、

「旅行が好きだったから」だという。20カ国以上の公用語であるスペイン語を学び、世界中を旅して人々と話したい――夢の実現に向けて、入学後はスペイン語の予習を欠かさず、部活や旅行、留学資金集めに精を出した。授業では、外交官出身の山田文比古教授のゼミを受講。国際政治の生々しい現実にあふれ、日本と世界のために働きたいという思いを募らせていく。

違う

価値観の中に身を置きたいと考え、大学

3年の秋にスペインのポンベウ・ファブラ大学に留学。学業の傍ら、フライングデイスクの競技団体に飛び込み、チームスポーツを通じて交流を深めた。最初はスペイン語

日本語も含めて、

「あなただけの言語」を

4年間かけて身につけてください。

言語

語はコミュニケーションの手

段である、とよく言われます。コミュニケーションでは、お互いにわかりあうことだけでなく、相手と自分が違うことを示すことも大切です。コミュニケーションにはそうした相矛盾する二つの機能があり、それによって単一言語を使用しているように見える地域であっても、実際には多種多様な文化が実現しているのだと思います。ましてや複数の言語を使用する地域では、言語と文化の関係はとても複雑です。

人々が地球的な規模で、頻繁に接触を繰り返すようになった今日くらい、多言語と多文化の関係性を理解し、その橋渡しとなる若者たちが必要とされる時代はありません。言語文化学部では、4年間かけて、世界のいろいろな地域の言語と文化を学修し、それと並行して英語力をブラッシュアップすることで、第一線で活躍する国際教養人の育成を目指しています。



言語文化学部長

川口裕司

新しい言語と文化の学修は時間がかかるだけでなく、自己のアイデンティティとの対峙を迫られる苦しい作業です。しかしだからこそ、若いうちに一度は経験しておいたほうがいいように思うのです。やみくもに新しい言語と文化の学修を始めるのではなく、例えば東外大が開発したウェブ上の言語教材「TUF S言語モジュール」などのページで、学修しようと考えている言語をちよつとだけかじってから決めるのがいいでしょう。また、学修する言語を実際に使っている自分の姿を思い描き、話し相手がどういう人なのかを想像してみてください。きつと言語と文化の関係を考える糸口になるでしょう。

※TUF S言語モジュールに関する詳細は
<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/>

岩崎稔

国際社会学部長



冷戦が終結した1980年代末からだけ

時代と世界が君たちを待っている。

今、情性や前例主義では解けない事態に私たちの市民社会は直面しています。それに立ち向かう力を育むことは、常に時代の前衛である本学の使命です。時代の奥底で起こっている大きな変化に反応して、国際社会学部が、国際社会にかかわる総合的な教育のための新学部として出発したのです。

東京外国語大学でロシア語を学び、在学中に『優しいサヨクのための嬉遊曲』で、彗星のごとく文壇デビュー。一躍、「ポストモダン文学の旗手」として脚光を浴びたのが、作家の島田雅彦さんだ。郊外の新興住宅地を舞台に若者の生活を描き、前衛的な作風で注目を集めた島田さん。その後もさまざまなスタイルを模索し、変貌を遂げてきた。小説執筆のみならず音楽評論、オペラ脚本、映画出演など幅広いフィールドで活動を展開。現在は法政大学国際文化学部の教授としてサブカルチャー論や演劇論、文学などを講じて、後進の指導にも当たっている。学生に知の喜びを伝えるためには「学生の側だけに努力を求めるのではなく、教える側にも努力が必要」と語り、大学教育の現状に一石を投じる。

文・吉田耀子 写真・青木倫紀

学長 亀山郁夫対談

ゲスト

島田雅彦氏

作家

失われつつある
身体性を
いかに
回復するか

しまだ まさひこ

1961年生まれ。84年東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業。在学中の83年、『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。
主な作品に『彼岸先生』（泉鏡花文学賞）、『僕は模造人間』『自由死刑』、『退廃姉妹』（伊藤整文学賞）などがある。オペラ台本はオペラ『忠臣蔵』、『T. バタフライ』。日本文藝家協会理事。現在、法政大学国際文化学部教授。



亀山郁夫学長（以下、学長） 島田さんは、作家と大学教授という二つの日常を、どのように過ごしていらっしゃいますか。島田雅彦（以下、島田） けっこう、のんびりと暮らしています。家で執筆している日は「光合成」している感じがありませんね。大学の出講日は、講義が終わると都内を徘徊し、「秘境」を探訪しています。僕はお酒が好きなんですけど、同じ地域で飲むことが多くなって発展がない。そこである日、意を決して、家に帰るのとは逆の方角に行って飲んでみたんです。これはハマりますね。

学長 そこから、どういう感覚が生まれるんでしょうか。

島田 まず、自分自身に違和感を覚ええました。外国でも、ショウウィンドーの前を通ったりすると、まだ街に溶け込んでいない自分を発見する。「あ、外人が



に、ネットを使うことが多くなりました。おかげで、データ収集は楽になりましたが、実際に現地を訪れたり、関係者に会ったりする機会はか

なり減りました。パソコンやiPadのようなツールが便利に使えるようになった分、身体性のほうはかなり退化してしまっただけです。その状況を自覚させてくれたのが、3・11です。電気の供給が止まれば、PCや電話をはじめ、日常生活で不可欠なものはほとんど失われてしまう。一度、石器時代に戻るわけですから、生き延びられるかどうかは、その人の身体に宿る「教養」にかかっている。コミュニケーションも同じで、一番の基本は「情報伝達の広場に行つて、人から聞く」という原始的な手法です。語ることの原点は、やはりそこにあると思うので、どこかでリハビリを自分に課したいという思いはありますね。

学長 身体性の回復ですか。

島田 それが重要ですよ。そこには、最古のコミュニケーションのスタイルを宿しておくことと、自分の手でものを作るということも含まれます。

学長 なるほど。もの作りに関連して言うと、今日、本学に來られて、「自分の庭に緑の空間を作りたい」という気持ち

る」という感覚です。そういう感覚は、割と好きですね。捜査という探偵的な目的がないままに、現場に行つて聞き込みをしているような。盗聴しているとか、覗き見しているというか（笑）。

学長 その意味では、日常の中で覗き見できなくなったことが、現代人の悲劇かもしれませんね。インターネットで世界が近くなった分、身体的感覚を伴つて、ゾクゾクするような異世界を経験できる機会が失われてしまった。島田さんは作品の中で、郊外におけるユートピア的なものをお書きになつています。そこには、「自分が住む土地をいかに非現実化して見るか」ということがあったと思います。が、今は「郊外にある自分」というものを異化できなくなった、ということなの

教養とは、世代間の対話の中で構築されなければならない

——亀山



教える側にも、学生に伝えるための努力が必要です

——島田

島田 京都の高台寺のように「庭が主役」のお寺では、どの筈を竹にするか、どの筈なら食用にしてもいいかが、位置によつて全部決まっています。秋になつて庭の落ち葉を片付けるときも、落ち葉を何枚残すか、どの場所に残すかまで厳密に決まっています。だから、京都の寺の庭は一見、自然に見えるけれど、徹底して人工的に管理されているんです。そのことを知つて以来、職人に対するリスペクトが非常に高まりました。言葉の組み合わせに生きがいを感じるという点では、「物書きも職人だ」という自負もありますし。その意味で、いろいろなジャンルの職人が辿り着いたマテリアリズムに、すごく興味がありますね。

日本人とロシア人の音楽性には共通点がある

学長 島田さんは小説以外に音楽評論にも精力的に取り組んでおられます。島田さんにとつて音楽体験とは、どのような意味を持つているのでしょうか。

島田 一つには、音楽を「快楽の技法」と見ています。西洋音楽は、宗教儀礼や数学理論と結びついて発展したこともあつて、古典的な楽曲は極めて構築的です。一方で、バツハの時代から、音楽は喜怒哀楽と密接なかわりを持ち、踊りや身体性と結びついて発展してきました。いふなれば、快楽の回路に効果的な刺激を与えてくれるのが、音楽だと思います。

ら、酔っぱらいの長広舌に耳を傾けたりしている。僕も街を徘徊しながら、同じようなことをやっていますね。

語りの原点を自覚した3・11という経験

学長 「自分の家とは別の方向に向かう」ことから、新しい小説世界が生まれる予感のようなものはあるのでしょうか。

島田 僕は、これから書く小説の取材というのは、ほとんどしないんです。以前、^{エトワラ}沢村を舞台に小説を書いたことがあるんですが、実際に現地に行つたのは、執筆を始める10年前です。経験をいったん内面化し、それを表に出すためには、寝かせて発酵させる時間が必要なんです。それは、3・11の震災からまだ日が浅い時期に、作家がどんなアウトプットをするかを期待されても困る、という説明にもつながります。

最近では、小説執筆のためのデータ収集

エンターテインメントとして、これほど厳密に形式化されているジャンルは、ほかにないのではないのでしょうか。

学長 島田さんご自身も、音楽の構築の見事に注目して、分析的に聞こうとするほうですか。それとも、音楽がもたらす快楽の部分に重きを置き、音楽によつて全体的な経験をすることに喜びを感じるほうですか。

島田 いやあ、鋭い指摘ですね。音楽には、左脳のなれしみと右脳のなれしみの二つがあると思います。音楽の構造が知りたくて、つい分解したくなるという楽しみ方もあれば、音楽を解剖する代わりに舐め直し、音楽そのものを慈しむという楽しみ方もあるわけです。亀山先生のように演奏者として音楽にかかわる場合は解剖的アプローチに快楽を感じるでしょう。私もそうしたいです。

脳と音楽の関係について言えば、日本人の耳は、鳥のさえずりや葉ずれなどの自然の音を、音楽的に聴く性質があるそうです。テンポ的にはスローな音楽のほうが、日本人には感覚的にしっくりくる

も文化のバックボーンも違うし、一つには歴史を踏まえずにしゃべりたくない。だから、まずは歴史認識を持つことが大切だと思っていますね。

学長 その場合の歴史認識というのは、日本に関してですか。

島田 そうとは限りません。19世紀ヨーロッパでは歴史小説ブームが起りましたが、これらは、「今の私たちの生活はどのような因果によって成立したのか」という、ブルジョア階級の好奇心に応える形で書かれています。就職難に苦しむ今の学生も、「バブルを経験した人間はいい気なもんだ、俺たちはこんなに苦労しているのに」という思いがあるなら、どんな因果によってバブルが生まれ、崩壊したのかを突き止める必要がある。それを知っていれば、先行する世代とやりあえるし、未来に向かってどう進めばいいかもわかってくると思うんです。

学長 非常に大事なことをおっしゃいました。つまり、歴史認識を持つということは、現在の状況を考えるために、歴史上のホットスポットについて一定の理解を持つということでもある。それが、教養教育のベースになるということです。島田 そういうことです。歴史にはターニングポイントがありますから、その地点にバーチャルに立ってみろ、と。過去の重要な転換点に生きてみて、疑似体験をすることが大切だと思うんです。

学長 しかし、現在の教育の中で、それが可能だと思えますか。全世代で共有できるほどの歴史認識を持てるまでに、学生を引き上げることができるのでは

大事だと思うんです。

そこで、昨今言われているのが「教養教育の再興」です。ところが、教養というと、すぐに古典重視といった古い教養主義の考え方が持ち出される傾向があるんですね。このグローバル化の時代に、そんなものは普遍的な人間形成に役立つ知とはなり得ない。私はこの5年間、ドストエフスキーのことを話し続けているのですが、そこで思ったのは、

「教養とは、世代間の対話の中で構築されなければならない」ということです。教養とは時代とともに変化するべき知の体系であるはずなのに、大学教育の現場にいる主に50代以上の人たちは、少なからず自分の知の中に閉じこもってしまっている。若い人たちに教養を授けるためには、専門知を深く広く知らしめるための努力を怠るべきではないと思うんです。

島田さんは大学人として、どのような教養教育像をお持ちですか。

島田 今、大学では「就業力」という言葉が目立っていますよね。勤務先の法政大でも、「就業力をいかに育てるか」という議論がありました。資格取得やルール順守は、就業力とはあまり関係がなくて、要は「教養に尽きる」ということなんです。会社組織に入ると、同世代の友人だけでなく、幅広い世代や国籍の人たちとコミュニケーションしなければならなくなる。全ジェネレーションに対応し得る教養を身につけるのは、けっこうたいへんなんです。時代によって教養



人的なところがある。レヴィ・ストロースは日本人を見ると、まるで古代人に会ったみたい、親しげに握手を求めてきたそうです。古代的な感覚を共有するという意味で、ロシア人はヨーロッパ人よりも、はるかに日本人に近いのではないのでしょうか。

「就業力」につながる 教養を身につけることが

学長 確かにそうかもしれません。ところで島田さんは、法政大学国際文化学部で教えられていますね。学生にどんなことを伝えたいとお考えですか。

島田 昨今は大学教育の専門化が進んだこともあって、学生にレポートや論文を書かせるとき、教員は「あまりテーマを広げすぎるな」と指導するんですね。僕はむしろ逆で、「広げるだけ広げてしまえ」と言いたい。小さな穴をひたすら深く掘るだけでなく、アリの巣みたいにあちこちに拡散するのも、知性の一つの在り方だと思っています。むしろ、そちらのほうが、人間の神経構造には合っているのではないか。僕は、どんな脇道にそれるべきだと思います。

学長 狭いところばかり掘っていると、神経も発達しないまま死んでしまうということですね。私も非常に同感です。学問とは、ただ一徹に突き詰めればいいというものではない。ほかの可能性を殺さないよう、常に脇道にそれていくことが

のではないのでしょうか。逆にビートルミュージックなどは、日本人の伝統的な耳にはあまり合わないような気がします。武満徹が作った音も、ショスタコーヴィチやベートーヴェンとはまったく違ったものになっているわけですし。

学長 武満を発見したのはストラヴィンスキーで、彼はどちらかといえば、ビートル化するのが得意な作曲家でした。彼は武満との出会いを通じて、「日本人の耳は自分とは全然違う」ことを発見したのかもかもしれません。ところで、日本人はチャイコフスキーやロシア民謡が大好きです。日本人とロシア人の音楽性には、何か共通点があるのでしょうか。

島田 山田耕柁はドイツ留学中、やはり西欧の音楽に違和感を覚えたようです。彼が一番共感を覚えたのは、ロシア人作曲家のスクリャービンでした。ドイツで発展した数理的な音楽理論よりも、ムードで流れていくロシア音楽のほうにシンパシーを感じたのです。その後の山田耕柁の歌曲にも、ロシア民謡に近いセンチメンツがある。その辺でつながるものはあると思います。

現代でもロシア人は、古代的な生活様式を保つシベリアの少数民族とふれあって暮らしています。日本人も縄文人にシンパシーを感じるなど、どこか古代



うか。

島田 端的に言って、手法の問題で解決できると思います。「いかに私語の少ない授業を展開できるか」「いかに授業にエンターテインメントの要素を盛り込めるか」、あるいは「世代によって用語法に違いが生じたときに、いかにその違いを埋めるか」というようなことですね。その意味では、教える側にも努力が必要です。学生の側だけに努力を求めるのはアンフェアですから。

優秀なセールスマンは、商品の説明よりも「自分語り」をするんだそうです。商品を売っている自分自身を、まずは顧客に信頼してもらうところから始める。「この人はいい人だな」と思わせることに成功すれば、いくらでも買ってもらえるそうです。

学長 商品自体にそう差はないから、あとはいかに魅力的に見せるかということですね。「技術によってどうにでもなる」ということは、僕も今までほとんど気づけなかった。90分間の講義をいかにうまく演出し、学生を刺激して眠りから揺り起こすか。知を喜びとして体験させるために、教師もありとあらゆる手立てを用い、心を碎かなければならないということです。今日はありがとうございました。▼



かめやまいくお

1949年生まれ。東京外国語大学長。ドストエフスキー関連の翻訳・研究や、ソ連・スターリン体制下の政治と芸術の関係をめぐる著書が多い。主なものには『ドストエフスキー 父殺しの文学』、翻訳『カラマーゾフの兄弟』『罪と罰』ほか。



graduated active person in society_02

待っているだけでは楽しめない 當間玉規

日本政策投資銀行 プリンシパル投資担当

公的金融機関として、日本の産業や地域の活性化に対し、金融面で貢献する日本政策投資銀行。その最前線で活躍する東外大O Gが當間玉規さんだ。

「今の仕事は、国内外の成長企業などに投資して、その成長を支える仕事。世の中の役に立っているという実感がありますね」

高校の授業でフランス語を学び、東外大フランス語専攻に進学。在学中は外語祭実行委員会の財務局長として、会計や計画立案、対外交渉などを取り仕切った。

大学3年の夏には、フランスのストラスブールに語学留学。だが、初めての海外一人暮らしは、當間さんにとって試練の連続だった。

「フランスの行政機関はお役所氣質が強く、なかなか思うように物事が進みません。でもあきらめずに交渉し続けるしかなかったのが、相手にノーと断られてもめげなくなりました。これを繰り返すうちに自分の主張をアピールすることが得意になったので、就職活動では役立ちましたね」



外語祭実行委員会では会計のほかに事務や意見調整など裏方の仕事も経験した。

とうま たまさ
2007年東京外国語大学フランス語専攻卒業後、国内大手証券会社に入社。2012年日本政策投資銀行に転職し、国内外の成長企業に対するプリンシパル投資を担当。現在に至る。

で感じたことも、将来の進路を決める動機となった。

「両親から銀行送金を受けていたこともあり、為替に興味を湧きました。経済の勉強をするのが楽しくなり、帰国したときには、『将来は金融に進もう』と決めていました」

卒業後は国内大手証券会社に就職し、投資銀行部門でファイナンサーやM & Aの仕事を担当した。その後、投融資一体の金融サービスで企業や社会を支えたいと思い、日本政策投資銀行に転職。

「将来的には融資を含めた総合的な金融サービスを提供できるようにになりたい」と語る當間さん。大学時代の経験が今に生きていることは多い、と振り返る。

「東外大では、最初の2年間は語学漬けの毎日でした。とはいえ、外語祭実行委員会、アルバイト、旅行など勉強以外のことにも積極的に取り組みました。この経験が、今の仕事に生きていると実感しています。大学生活はただ待っているだけでは楽しめないのも事実。自発的に行動して悔いのない学生生活を送ってほしいです」



graduated active person in society_01

“変わり者”は意外に楽しい 中川亮平

立命館大学 講師

「アジア通貨危機、9・11、リーマンショック——激動する世界経済に翻弄されて、今に辿り着いた、という感じです」

そう語るのは中川亮平さん。国際金融マンとしての経験を生かし、現在は立命館大学で「生きた経済」を学生に教えている。

1992年東外大に入学し、ポランド語を専攻。音楽史や文化を学び、毎年ポランドに足を運んだ。折しも、東欧革命の熱気冷めやらぬ頃。資本主義へと移行するポランドの変化を肌で感じ、「経済・金融関係の仕事がしたい」と思うようになった。

卒業後は東京三菱銀行に入学し、社会人としての地力を養ったが、アジア通貨危機にかかわるうちに、経済知識の不足を痛感。米国コロンビア大学大学院に留学し、途上国の経済開発などを学んだ。

大学院にはそれまで出会うことのなかった紛争地域の難民や亡命者も多くいた。多様性の渦の中で、それまでの価値観が覆されるような思いだった。

そして、9・11のテロに遭遇。



在学中は毎年ポランドを訪れた。大好きなショパンの生家で。

なかがわ りょうへい
1972年東京生まれ。97年東京外国語大学ロシア・東欧語学科ポランド語専攻卒業後、東京三菱銀行(現・三菱東京UFJ銀行)に入行。2001年米国コロンビア大学大学院(国際公共政策)に留学し、03年修士号取得。米国AIG(2003~2008年)、スイスの世界経済フォーラム(2009~2010年)を経て、現在は立命館大学国際関係学部講師。

「あのときに見たものが、その後の人生における判断基準になったという気がします」

その後はAIGのアナリストとして活躍し、恩師の代役でコロンビア大非常勤講師も務めた。

「優秀な学生と接するのは刺激的な体験でした」

2008年のリーマンショックを機にAIGを退社。「ダボス会議」を運営する世界経済フォーラム勤務を経て、立命館大学の講師として採用された。「サラリーマンとして、ダボス会議やウォール街という極端な世界を見てきました。この経験を学生にフィードバックできればと思っています」。

グローバルな舞台で華麗なキャリアを積んできた中川さん。その節々で、東外大で学んだポランド語が大いに役立ったという。

「ポランド語を話す日本人は珍重されるし、ポランド移民は世界中にいます。友人が作りやすいと思います。マイナーな語学をやる人間は変わり者かもしれないけれど、『変わり者って意外に楽しいな』と、常々感じています」

音声を通じて人類創成の謎に迫る

Interview with Yukie Masuko

旧約聖書によれば、神はバベルの塔の建設に怒り、それまで一つだった人類の言葉をバラバラにして、互いに意思疎通できないようにしたという。神のなせる業かどうかは別として、現在、地球上には5000から8000の言語が存在すると言われている。

人類は言語を獲得する過程で、どのように音を出すことを学び、どのようなルールによって言語を組み立てたのか。その壮大な謎に迫るのが、音声学という学問だ。

「例えば音楽では、一つの音を聞いたときに、みんなが同じ印象を持つわけではない。ところが言葉の場合は、どんなに話す速度や話し方が違ってても、ある音の塊が特定の言葉を指していることを、同じ言語集団の全員が知っている。誰に教えられたわけでもないのに、なぜそんなことが可能になるのか。その理由が知りたくて、言葉の音を研究対象に選んだのです」。そう益子幸江氏は語る。益子氏が言葉の世界に魅せられ

たのは中学時代。英語の授業で、「言葉が細かいルールの積み重ねによって成り立つシステムである」とことを知った。

言葉に興味を持ち、1975年、東外大のフランス語学科に入學。

「フランス語学科にはフランス文化に興味がある人々が多かったので、クラスメートからは浮いていましたね。当時の東外大には、故・吉沢典男教授が主宰する音声学講座がありました。授業を通じて、言語学が文化人類学的な広がりを持つ学問であり、自分の興味が音声にあることもわかりました」

卒論ではフランス語の母音の「e」（狭いエ）と「ε」（広いエ）の区別について研究。調査や執筆を進めるうちに、さまざまな疑問が湧いてきた。だが、疑問に答えてくれる先達や書物はどこにも存在しない。「それなら自分で解明するしかない」と考え、大学院に進学。フランス語よりもインフォマン（母語話者）を探しやすい日本語を研究対象に選んだ。

人間の音声認識を支える複雑なメカニズム

益子氏が研究テーマに選んだのが、「日本語の長母音と短母音の関係」である。日本語には「長い」母音と「短い」母音がある（例えば「おばあさん」と「おばさん」。では、私たちはこの二つをどう区別しているのか。例えば、それが、

「あ」という母音の物理的な長さによるものだとすれば、「10ミリセカンドなら長母音で、30ミリセカンドなら長母音」というような基準は存在するのか。だが、世の中には早口の人もいれば、ゆっくり話す人もいる。長母音と短母音の区別は、結局のところ、物理的な長さとは関係がないのではないかと、益子氏は実験を重ねるうちに、ある仮説に辿り着く。

「例えば、『ジョーヤ』と『ジョヤ』という二つの単語があります。『ジョーヤ』は3拍で『ジョヤ』は2拍ですから、単語の拍数によっ

音声学研究の仕事に就く最後のチャンス」と考え、応募したところ、助手として採用されることに。これを機に、益子氏は音声学研究者として、着実に地歩を築いていく。

外国語学習のつまずきを予防する効果も

「音声学でおもしろいのは、ネイティブスピーカーには同じ音でも、実は違う音であることが多い点です。それでコミュニケーションがうまくいっている間はいいいのですが、時には問題が起こることもある。特に外国語学習では、音の違いを理解しないと、問題に対処できないケースが多いのです」

例えば、「メン」という単語。「メンも」というときは、「ン」の段階で唇を閉じているが、「メンしか」

1942年に英語で出版された『The Vowel』（著者／千葉勉、梶山正登）の日本語版（訳者／杉藤美代子、本多清志）。日本語のアイウエオ（母音）について、発音するときの口腔の形と、それぞれの母音の音響的特徴などが詳細に書かれている。この本に書かれている理論を形にしたのが上の写真。母音を発音するときの口腔の形の模型。底の穴からブザー音を送ると、上部の穴から母音が聞こえる。左から、アイウエオの順。

母音

千葉 勉
梶山正登
杉藤美代子
本多清志

音響書店

新約聖書の『ヨハネによる福音書』には、「はじめに言葉ありき」という一節がある。人類創成のエポックとも言える、言葉の発明という偉業。その謎の一端を明らかにすべく、益子氏は今日も言葉の音と格闘し続けている。▼



舌付喉頭模型。
授業は、学生が、口腔やノドの
仕組みを立体的に
理解できるよう模型を用いる。

沸騰する中東の「今」を解き明かす

Interview with Hiroyuki Aoyama

2010年から11年にかけて、チュニジアで「ジャスミン革命」が勃発。「アラブの春」と呼ばれる大規模な政治変動のうねりを引き起こした。騒乱は強権支配が続くシリアにも波及したが、混乱する政情はいまだ鎮静化の兆しを見せない。アラブ世界の政治を研究する青山弘之氏はこう語る。

「シリアでは、『独裁政権に対する民衆の抵抗』というイメージとはかけ離れた、泥沼の政争が起こっています。日本人は中東を単純化した図式で捉えがちですが、それでは、我々の国際感覚が問われる事態になりかねない。中東の現実をできるかぎり克明に伝え、的確な判断を下すための材料を提供しなければならぬ——そんな思いで、『アラブの春』の実態解明に取り組んでいます」

人生を変えた シリアの友人の言葉

青山氏が東外大に入学したのは1987年。「多くの国で話され

ばり訣別する。青山氏が、生涯をかけてシリアの「今」と格闘する決意を固めた瞬間だった。

現地の情報を手がかりに 中東の今を読み解く

「日本の中東研究は歴史学や人類学といった分野では、優れた成果を上げているが、現代の中東を研究している人は少ない。これはゆゆしき問題です」

現在、シリアでは未曾有の騒乱が続き、世界は固唾をのんで成り行きを見守っている。そんな中、日本の報道姿勢には疑問を感じざるを得ない、と青山氏は語る。

「日本のメディアは今回の動きを、『独裁者に対する民衆の革命』と位置付けていました。確かに、バ

ている、英語以外の言語」を学びたいと、アラビア語を専攻した。

在学中、バックパックを背負ってシリアやヨルダン、エジプト、パレスチナ（イスラエル）を周遊。紛争の火種がくすぶる中東を生で体

感した。中東の人々は親日的で、日本に対しては「米国と勇敢に戦い、敗戦から見事に復興を遂げた国」というプラスイメージを持っている。旅先ではよい友人もでき、気がついたら中東世界と、相思相愛の仲になっていた。中東の過去ではなく現在を研究してみたい」と考え、卒業後は一橋大学大学院社会学研究科に進学。国内では未踏の分野である、現代中東地域の政治や思想の研究に打ち込んだ。

大学院での研究テーマは「シリアのムスリム同胞団」。シリアでは、70年にバアス党（汎アラブ民族主義政党）のハーフイズ・アルIIアサドが政権を樹立すると、イスラーム主義組織のムスリム同胞団が勢力を拡大した。だが、政権側の激しい弾圧を受けて、ムスリ

ツシャール・アルIIアサド現大統領の反政府勢力に対する弾圧については非難されるべきですが、騒乱勃発から1年半が経過しても、アサド政権はまったく揺るがない。その理由を説明するためには、別のアプローチが必要ですよ」

米国や西欧諸国は「人権擁護」という大義を掲げ、日本人もメディアを通じて西側諸国の見方を刷り込まれている。国連安保理ではシリア制裁が再三にわたって否決されたが、「ロシアと中国が拒否権を発動し、アサド政権への制裁を拒否した」と西側メディアは一斉に報道した。だが実際には、ロシアと中国の見解は、「両当事者をまず対話させ、それからアサド政

権を倒すかどうかを話し合えばいい」というものだった。そこには、国際世論を誘導しようとする西側の意図が透けて見える、と青山氏は指摘する。

「独裁政権を武力で打倒せよ、と声高に主張しているのは一部の西側諸国にすぎない。実は、シリアを不安定にした張本人は、我々、西側諸国なのです。西側は石油を手に入れるためイラクに介入したり、ヨロツパのユダヤ人のためにパレスチナにイスラエルを作ったりして、中東に不安定の種をまいてきた。シリアの権威主義体制を黙認したのも、

ム同胞団の反体制運動は政治的に挫折していく。そのプロセスを明らかにすべく、日夜研究に取り組んだ。そんな青山氏に転機が訪れたのは、フランス・アラブ研究所共同研究員として、首都ダマスカスに滞在のことだった。

2000年6月、絶対的な指導者のハーフイズ・アルIIアサド前大統領が死去。このときのシリア人の反応に、青山氏はいたく興味をそられた。反対派弾圧で悪名の高かった指導者が死んだというのに、シリアの人々は茫然自失の状態に陥っている。そのとき、友人のシリア人から言われた一言が、深く胸に突き刺さった。

「大統領の死によって、これからシリアは大きく変わっていくだろう。だが、言論統制下にある我々シリア人が、その変化を記録することはできない。我々の代わりに君が情報を集めて、今、目の前で起きていることを研究してほしい」これを境に、青山氏は、資料に基づくアラブ政治思想の研究ときつ

中東全体の安定化のためです。一方で、アサド政権は、レバノンのヒズボラ、パレスチナ諸派を支援する傍ら、その暴走を防ぐなど、米国がまいた不安定の種をコントロールして自国の利益につなげてきた。いうなれば、現アサド政権は西側諸国にとっての安全弁であると同時に、我々自身が作ったモンスターとも言える。このように、西側の勧善懲悪的な見方から自由になると、中東のまったく違う姿が見えてきます。その全体的な見通しをいかに立てるかが、中東研究の課題と言えます」

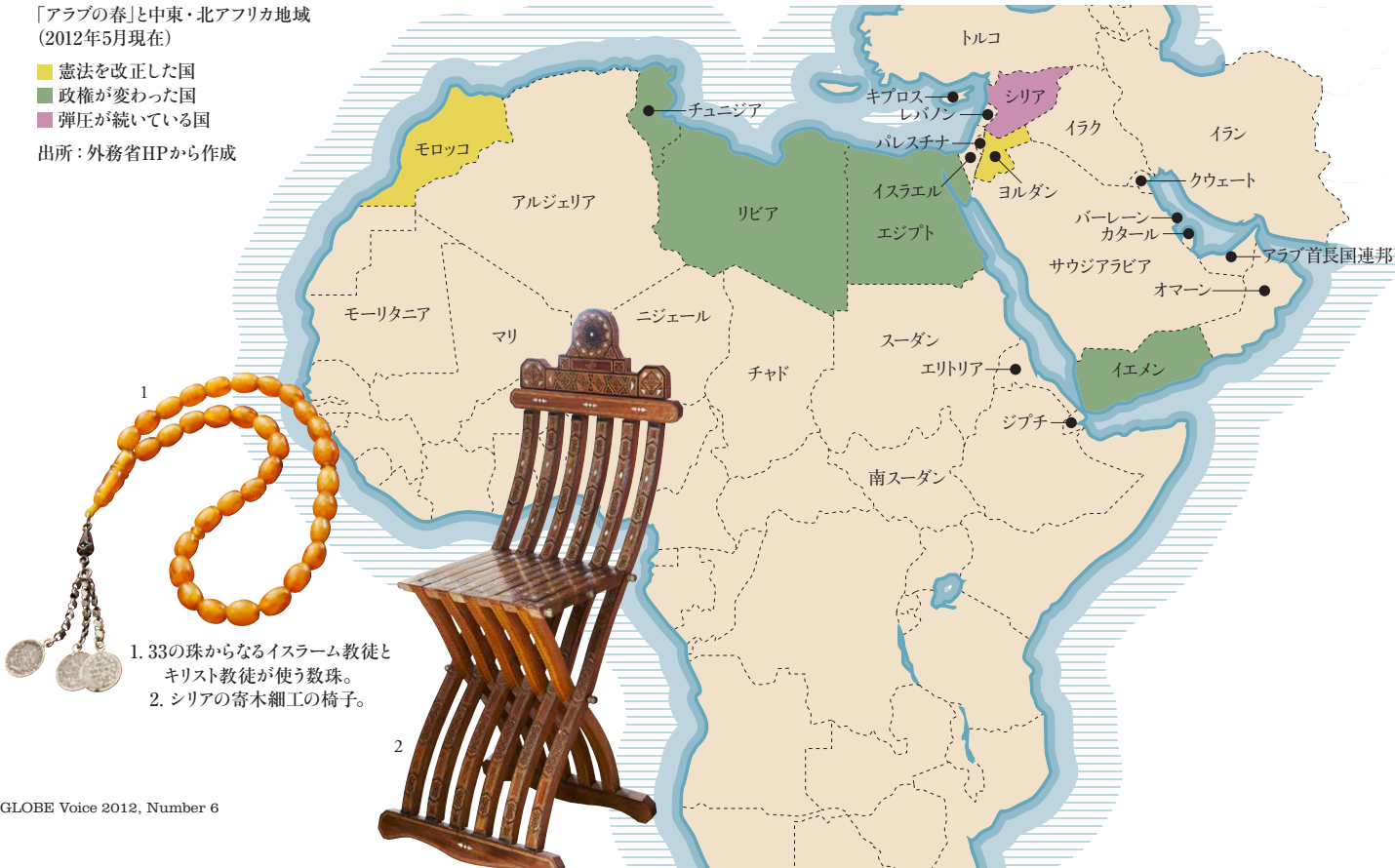
しかし、私たちは日々接する報道に基づいて判断を下しがちだ。その限界を超えて、多角的にものを見るためにはどうしたらいいのか。そのための武器を身につけるという意味では、東外大で学ぶアドバンテージは大きい、と青山氏。「日本は国際化したとはいえ、世界中から発信される情報に、間接的に接しているのが実情です。しかし東外大では、現地の新聞や人とのふれあいを通じて、海外の情報に直接アクセスする力を身につけることができる。それは、的確な判断を可能にするだけでなく、自分自身の人格形成にも役立てることができののです」

激動する世界の現場に身を置き、中東の「今」を凝視し続ける青山氏。その右手には、世界の行く手を照らす松明が高々と掲げられている。▼

「アラブの春」と中東・北アフリカ地域
(2012年5月現在)

■ 憲法を改正した国
■ 政権が変わった国
■ 弾圧が続いている国

出所：外務省HPから作成



1. 33の珠からなるイスラーム教徒とキリスト教徒が使う数珠。
2. シリアの寄木細工の椅子。

2

異文化コミュニケーションの深層を探る

Interview with Toru Miyagi

日 本語教育研究の世界的拠点として1970年に設立された留学生日本語教育センター。文科省の国費留学生や交流協定校の学生など、世界30カ国以上から集まった外国人留学生在が日本語を学んでいる。

ここで留学生の生活上の問題や言葉の問題を解決するための支援を担当しているのが、宮城徹氏だ。宮城氏によれば、インターネットの普及に伴い、留学生の悩みにも変化が見られるという。

「留学生のカルチャーショックは、以前ほど明白な形では表れなくなっています。来日前から漫画やアニメ、寿司などのことはよく知っていますし、スカイプの無料通話を使えば、毎日のように母国にいる家族や友人と話すことができる。以前と比べると、深刻なホームシックやカルチャーギャップに悩む留学生は減っています」

その一方で、母国とは異なる生活習慣にストレスを感じる留学生も相変わらず少なくない。中には、

人間関係が希薄なワンルームでの暮らしになじめず、部屋と教室を行き来するだけの孤独な毎日を過ごしている学生もいるという。

「留学生の悩みは人によって大きく違います。留学生一人ひとりが問題を解決するためのお手伝いできれば、と思っています」

日本人の英語「ジャパングリッシュ」があってもいい

国際基督教大学で臨床心理学を学び、82年に卒業。大学院を1年で中退し、家庭裁判所調査官として少年非行や夫婦関係の問題に携わった。

「当時はまだ、カウンセリングの仕事で食べていくのは難しかった。臨床心理学を生かして安定収入が得られるという意味では、家裁調査官は恵まれたポジションだったのです」

とはいってもの、「留学して本格的にカウンセリングを学ばた

い」という思いは日増しに募っていった。だが、仮に留学したとしても、カウンセリングの相手は外国人。不自由な英語で、相手の心の奥に秘められた思いや背景を汲み取ることなどできるのか、という不安もあった。折も折、ボランティアでタイ人に日本語を教えたのをきっかけに、「日本語教育」への新たな関心が芽生えていく。

92年、仕事を辞めてオーストラリアのモナシユ大学に留学。大学で日本語を教えながら、96年に日本語教育で修士号を取得した。その後はメルボルン大学の常勤講師として日本語を教えた後、2000年に東外大に。以来、カウンセリングと専門教育の経験を生かし、留学生のカウンセラー・アドバイザーとして活躍している。

オーストラリアでの異文化体験は、宮城氏にさまざまな気づきをもたらした。それは、現在の仕事に大いに役立っているという。

「例えば、オーストラリアでアメリカ英語を話すと、変な顔をされ



宮城徹准教授

留学生日本語教育センター

インターネットによるボーダレス化と企業の海外進出が進む中、異文化を理解し受け入れられる人材への要請が日増しに高まっている。

東外大では来年度から、宮城徹氏による「異文化コミュニケーション」を開講する。

留学生相談と日本語教育で培われた豊富な経験をベースにグローバル時代の新たな知見を切り開く。

文・吉田耀子 写真・山崎亜沙子

日々の留学生相談が
仮説と検証の舞台

2013年度より宮城氏は言語文化学部で「異文化コミュニケーション」の授業を担当することになった。

「異文化コミュニケーションの研究は50年代に米国で始まり、日本では主に日米間比較の研究が行われてきました。しかし、今は米国的な思考法から脱却し、日本人の視点から異文化コミュニケーションを考える時期に来ているのではないかと思います」

古来、日本では、儒教や仏教の影響下で独自の価値観が育まれてきた。例えばこうした観点から、異文化コミュニケーションの深層にアプローチできるのではないかと宮城氏は言う。

研究の手がかりは、それだけにとどまらない。日々の留学生相談も、またとない知見の宝庫である。「ブラジル人学生から、日本人の勉強スタイルについて質問された

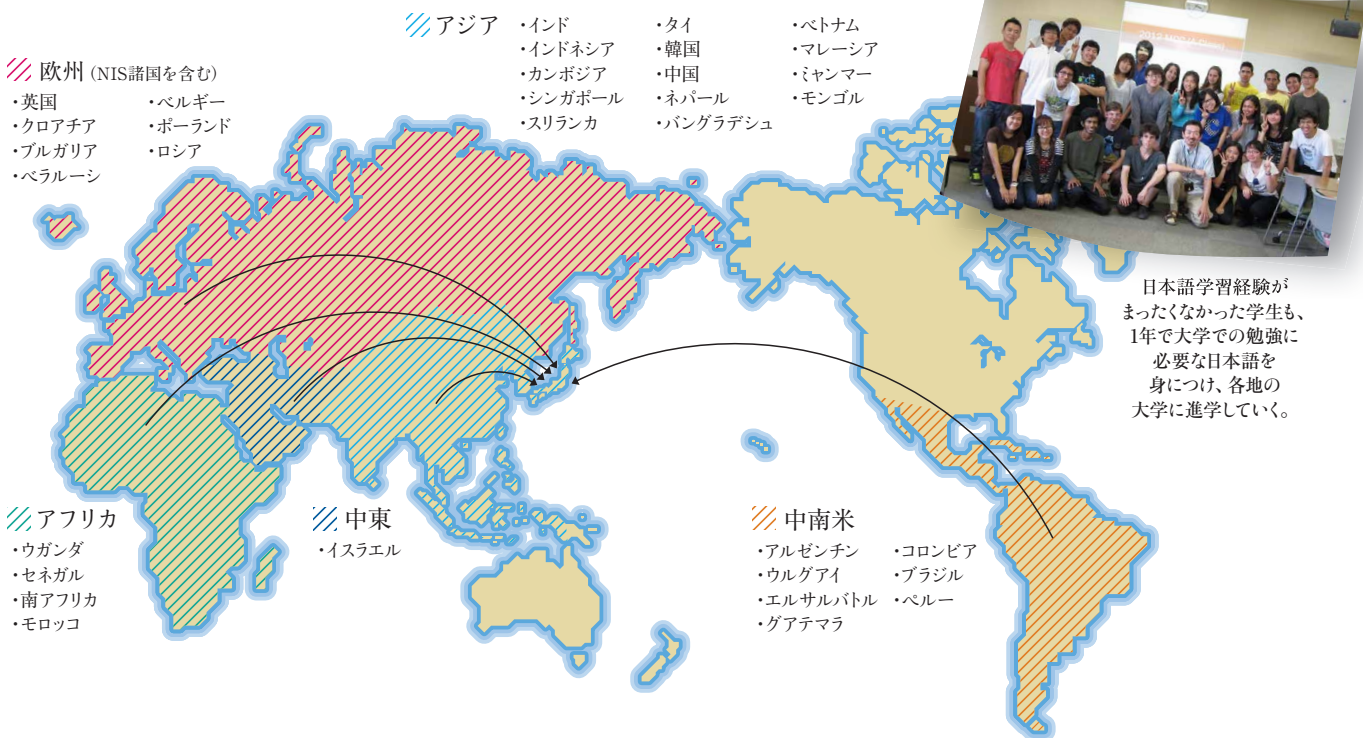
てしまう。『このアジア人は、なぜアメリカン・イングリッシュを話すのか』と不思議に思うらしいんですね。イギリス連邦に属する彼らから見れば、アメリカ英語を話すことは、『米国に従属していることの証明』のように思うらしいのです」

近年、英語教育の世界では「World Englishes」という概念が注目されているという。インドには「ヒングリッシュ」があり、シンガポールにも「シングリッシュ」がある。それぞれが独自の背景を持つ言語であり、日本人には日本人の英語「ジャパングリッシュ」があってもいいのではないかと、という考え方である。

「ところが日本ではアメリカ英語一辺倒ですし、日本語教育では、相も変わらず日本人の日本語」に近づけるための教育をやっている。しかし、留学生同士が日本語で話しているときは、必ずしも日本人からすると適切とは言えない独特の日本語世界が成立しています。世界のJUDOはもはや日本の柔道ではなく、日本の寿司の常識を超えたものが世界のSUSHIとなった。それと同様に、言語もまた、異文化との接触によって新しい姿に生まれ変わるといふ宿命を負っている。そのダイナミックな動きを理解することも、外国語を学ぶ上で重要な視点だと思ふのです」

■2012年度留学生日本語教育センター学生の出身国と地域

2012年は33の国と地域から留学生を受け入れている。



12の言語で学べる、日本語のE-learning教材。留学生日本語教育センターと情報処理センターとが共同で開発した。

「聴」

kiku

「聴は耳声を待つなり」。江戸時代の儒学者、荻生徂徠の言葉とされる。何気ない日常の中で、偶然あるいは必然に飛び込んでくる音がある。その音は突然で劇的かもしれない。音色に表情があるのなら、人は耳を傾け、そしてその音に隠されている心をつかまえようとするだろう。「聴」。五感で受け止めたその音色は、なぜか時が経っても色褪せることはなく、深く心に刻まれている……。

1. 駅の コマドリ

大学院総合国際学研究院 言語文化部門 教授
関口時正
Text: Tokimasa Sekiguchi

現代の 生活では、生物の声や自然現象の生の音にふれるより以前に、まずはテレビやコンピューターなどの機械を通して音に接することが多い。画面を観ながら滝の映像と音とタキという言葉とを、アニメの羊とその鳴き声とヒツジという語を連結し、学習してゆくのだ。

それに対して、それが何であるかもわからずにまず本物の音に出会うということもたまにはある。まだ若い頃、上州武尊山^{はなづか}の無人の避難小屋で夜を過ごしたときのこと、ヒー、ヒーと短い口笛を吹きながら、誰かが雨の降る闇の中をやってくるようで、とっさに私は道に迷った遭難者かと思った。だがそれにしては音の場所が変わる速度があまりに速い。しかも若干違う種類の笛が交互に響くので、まるで2人の忍者が林間を飛び交いながら近づいてくるかのような音だった。

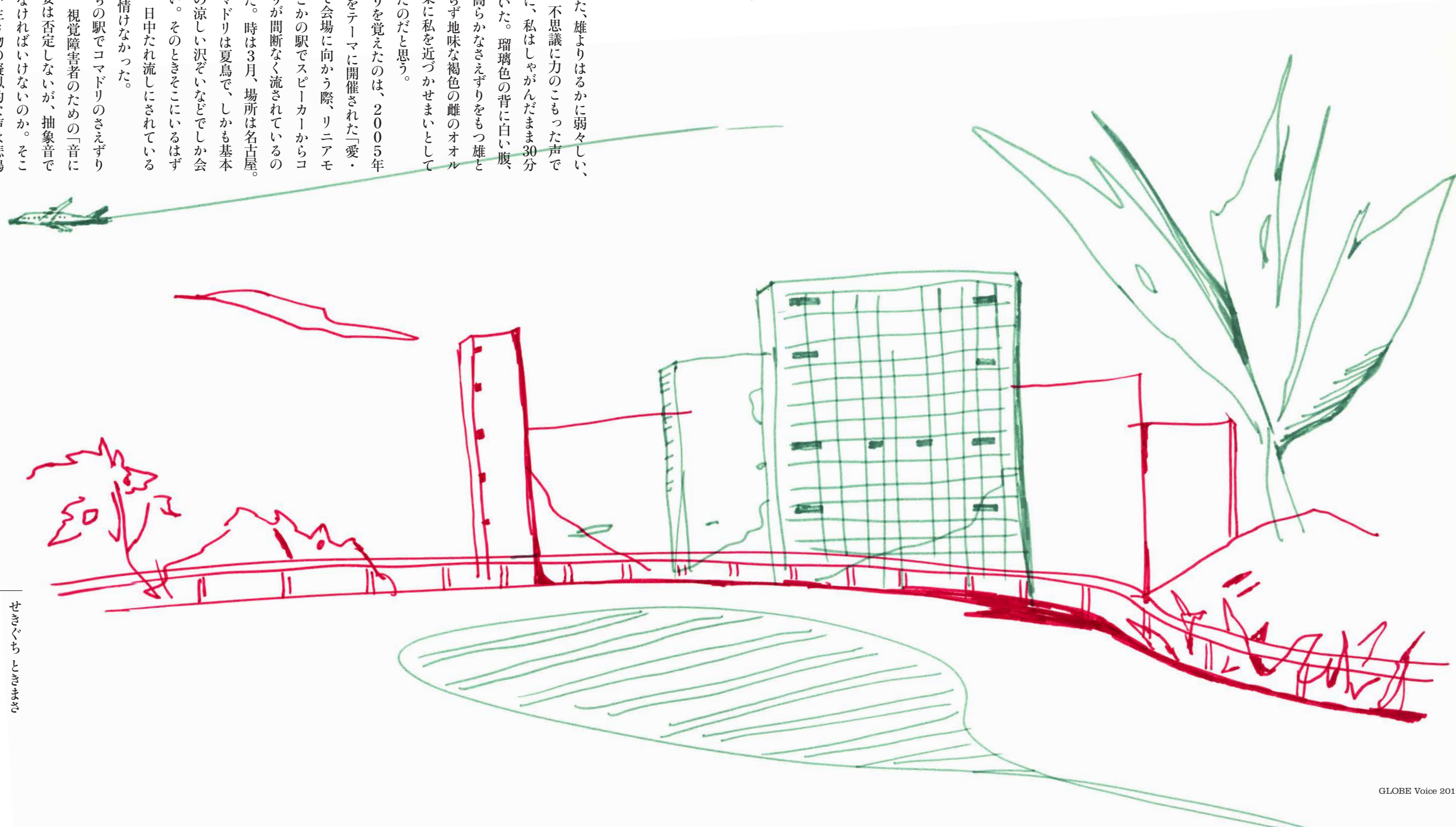
結局それはトラツグミという鳥の鳴き声だとわかった。源頼政が退治した妖怪ぬゑの正体とされる鳥で、姿を見たのはもつと後のことだが、たしかに虎のような色模様をしているし、真偽のほどは知らないが虎もヒューヒューという音を出すことも聞いたこともある。

6月初旬の夕方、全身を耳にして、雌のオオルリの声に聴き入っていたこともある。小川の上、水面からちょうど私の身の丈ほどの高さにはさしかかった枝で、ヒュールヒューヒュ

と低く、くぐもった、雄よりはるかに弱々しい、しかし芯の強い、不思議に力のこもった声で歌われるその歌に、私はしゃがんだまま30分は耳を澄ましていた。瑠璃色の背に白い腹、めりはりのある高らかなさえずりをもつ雄とは比べものにならない地味な褐色の雌のオオルリは、恐らくは巢に私を近づかせまいとして全力で歌っていたのだと思う。

そんな私が憤りを覚えたのは、2005年に「自然の叡智」をテーマに開催された「愛・地球博」の仕事で会場に向かう際、リニアモーターカーのどこかの駅でスピーカーからコマドリのさえずりが間断なく流されているのを耳にしたときだ。時は3月、場所は名古屋。日本で接するコマドリは夏鳥で、しかも基本的には亜高山帯の涼しい沢ぞいなどでしか会うことができない。そのときそこにいるはずもない鳥の声が一日中たれ流しにされていることが気味悪く、情けなかった。

今ではあちこちの駅でコマドリのさえずりが使われている。視覚障害者のための「音による案内」の必要は否定しないが、抽象音ではなく鳥の声でなければいけないのか。そこにいるはずのない生き物の擬似的な声は悲鳴に聞こえなくもない。奈良県では県鳥のコマドリの数が激減して希少種に指定されているが、都会のコマドリの亡霊はいよいよ増えるばかりか。▼



せきぐち とさま
東京大学大学院比較文学比較文化専修修士課程修了。専門はポースランド文化。訳書に『ショパン全書簡1816-1831』ポースランド時代『岩波書店』、『ヤン・コット 私の物語』みすず書房)他。

くどう かなこ

1989年国際基督教大学
教養学部卒業、92年同大学
大学院教育学研究科博士前
期課程修了。専門は日本語
教育学。『複合助詞がこれで
わかる』(分担執筆、ひつじ書
房、2007)、『国境を越え
て』(本文編)改訂版(分担執
筆、新曜社、2007)ほか。

2. 心に響く 故郷のことは

留学生日本語教育センター 准教授
工藤嘉名子
Text: Kanako Kudo

「ほんのぴやこ」

夜明けが
がった雲

のいろ ちゃんがちやがうまこ 橋渡て来る」
宮沢賢治の短歌「ちゃんがちやがうまこ」
の一節である。「ちゃんがちやがうまこ(＝チ
ヤグチャグ馬コ)」は岩手県盛岡地方の伝統
的祭りで、「ちゃんがちやが」は着飾った馬が
鳴らす鈴の音である。

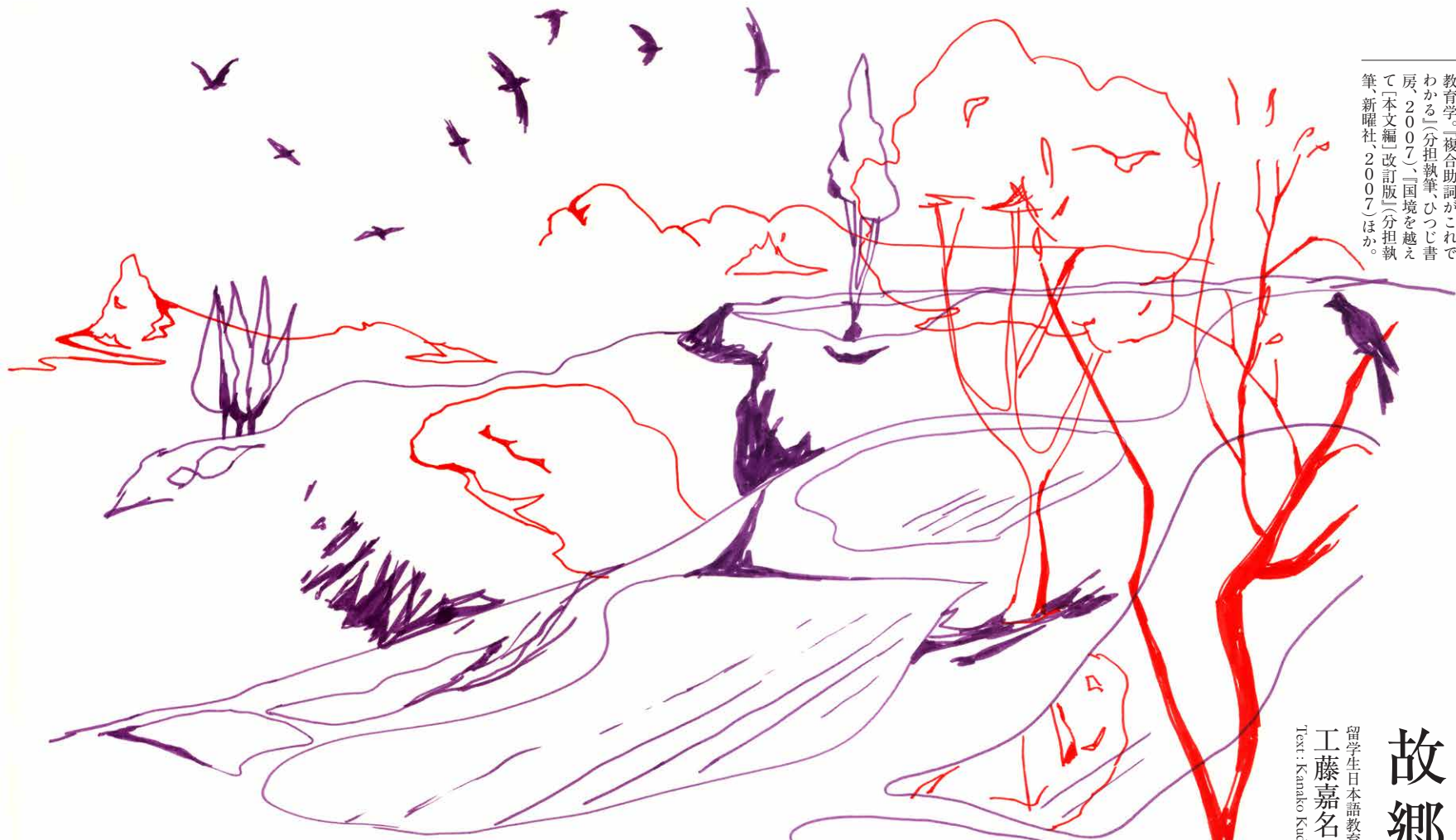
盛岡出身の長岡輝子氏の朗読で初めてこの
歌を聞いたとき、得も言われぬ懐かしさを感じ、
真綿でふんわりと包まれたような心地にな
った。盛岡方言のもつ独特の音とリズムは、
標準語の拍(モーラ)では表せない。「ちゃん
がちやが」も「ちゃんぢやんぐ」と鼻音化し、柔
らかい2音節になる。「うまこ」も、馬への愛
着を示す「ゝっこ」という接辞がついているが、

「うまっこ」の「う」は鼻音化し、促音の「っ」
も短く発音されるため、「んまっこ」と、これま
た2音節に聞こえる。

私は青森県八戸市の出身である。かつて八
戸と盛岡は同じ南部藩であったため、市内で
話される「南部弁」は、盛岡方言に近い。長岡
輝子氏の朗読を聞く度に祖母の声を聞いている
かのような懐かしさを覚えるのもそのため
である。「おんでおんで(＝おいでおいで)」と
手招きし、「めんこめんこ(＝可愛い可愛い)」
と頭をなでてくれた祖母も、おっとりとした
南部弁を話す人だった。

かく言う私は、東京の大学に進学してから
というものの、南部弁を封印すべく、アクセント
辞典片手に標準語の特訓をしたものである。
ところが、秋田、カナダ、京都と各地を転々と
するうちに、南部弁がふっと出てくるようにな
った。自分の声の録音を聞くと、促音も長
音もかなり短く、モーラになっていないこと
が多い。鼻音化しやすいのか、たまに風邪と
間違われることもある。

最近では、故郷のこともば代替わりし、祖父
母の代の南部弁を耳にする機会も少なくなっ
た。しかし、私の耳には祖母の声が今でも焼
きついていて、時折息子を「おんでおんで」と
呼び寄せ「めんこめんこ」と頭をなでては、そ
の響きを懐かしんでいる。▼



3. 失われた 響きを求める話

大学院総合国際学研究院 言語文化部門 准教授
菅原 睦

Text: Mutsumi Sugihara

話されている言語と違って、書
かれた記録としてだけ残ってい
る言語を実際に耳で「聴く」ことは、言うまで
もなく不可能である。もちろん歴史言語学と
いう分野があり、そこで開発された方法を正
しく使うことで、失われた言語を再構成でき
るということが知られている。しかし歴史言

語学で言う「過去の言語の再構成」とは―私
の乏しい知識から判断するならば―それぞ
れの言語に固有の「響き」までを復元できるも
のではないし、そもそもそれを目的とするも
のではない。こんにち世界にさまざまな言語
があつて、それぞれが固有の「響き」をもつて
いるように、既に失われてしまった言語にも
やはりそれぞれの「響き」があつたことは疑
いないが、古い時代の言語を研究の対象とす

る場合に、そのような「響き」を考慮に入れる
必要はないのか、それとも研究者自身が何ら
かの方法―例えばその言語と近い関係にある
現代語を参考にするなど―によってその言語
の響きをイメージすることが望ましいのか、
という点は、いわば研究の舞台裏の事情とし
て、あまり語られてこなかったように思える。

過去の言語と私たちとを隔てているものは、
実際に生の音を聴くことができないという点
だけではない。過去の言語を知る手がかりと
なる資料が、人々の日常の言葉をどこまであ
りのままに伝えているかという問題がある。
ヤカブ・ナジ(と読むのであろう)というハ
ンガリー人が、1672年にドイツで刊行し
たトルコ語会話の本が知られている。当時の
トルコ(オスマン帝国)で使われていたアラ

ビア文字ではなくラテン文字で書かれたこの
本に収められた会話例は、現在のトルコ語に
多少とも親しんでいる者にとって驚くほどリ
アルなものに感じられる。もちろん紙に書か
れた言葉の響きそのものに接することはでき
ないものの、このような良質の資料と向き合
うときに、研究者は過去の人々の会話を実際
に聴いているような経験を味わうのである。

しかしこういった資料に恵まれていない場合、
碑文や詩歌といったいわば普通の文献資料を
通して、過去に話されていた言語の生きた姿
に迫るのは容易ではない。ある高名な言語学
者は、自身の研究対象である過去の言語の話
者が一度だけ夢に出て来たということをごこ
かに書いていたが、そのような境地に達する
のはまだ先のことのようなのである。▼

すがはら むつみ

1987京都大学文学部卒
業、89年同大学院文学
研究科修士課程修了、92年
同大学院文学研究科博士後
期課程修了。専門は日本語
外国語大学着任、助手、講師
などを経て、2009年よ
り大学院総合国際学研究院
准教授。専門は、言語学、中
期チュルク語。共訳書に『デ
デ・コルクトの書』(平凡社
東洋文庫)など。博士(文学)。

「夢は、トルコで服を作ること」

加園千尋
トルコ語専攻 3年

Influential Face 歴史を刻む 在学生

Text by
Yoko Yoshida
Photo by
Misato Iwasaki



- 〈1〉日本の伝統的な武道を学ぼうと大学で空手を始めた。
- 〈2〉外語祭の語劇で作った衣装。シワになりやすく苦労した。
- 〈3〉毎日必ず持ち歩くポケットサイズのトルコ語の辞書。
- 〈4〉高円寺のアパートから大学まで、約15kmの道のりを自転車で行く。



「日本が長年かけて進めてきた近代化をたった10年でやってのけてしまう。しかも、人、政治、文化などの情勢まで複雑にかかわり合って刻一刻と変わっていく。不思議で奥が深く目が離せない。それがトルコの魅力です」。そう語るのは、トルコ語専攻3年の加園千尋さん。高校時代、英語研修で訪ねたロンドンで多くのトルコ人と遭遇。その人柄に魅せられ、トルコに関心を持つようになった。

東外大に入学後は、トルコ語の勉強に励む一方で、空手部とESS（英語研究会）、大学生協学生委員会「TuCoS（タコス）」に所属。興味のあることには躊躇せず積極的に参加した。「やることが多すぎてパンクしそうになったこともあります。だんだんとバランスのとり方をつかみ、楽しめるようになりました。並行していろいろなことをやるコツは、完璧を求めすぎないことです」

大学2年の春には、学外の英語劇団『モデル・プロダクション(MP)』に参加。会話はすべて英語という条件の中で、舞台の衣装とメイクに取り組んだ。この頃卒業後の進路に迷っていた。「普通に就職しても将来どうなるかわからない。それならば、好きなことを仕事にしようと思いました。MPの現場でみっちり鍛えてもらい、それに耐えられたら服飾の道に進もうと考えたんです」

MPでの経験で手ごたえを感じた加園さんは、本格的に服飾の道を目指すことに。夢に一步でも近づくため、今春から服飾専門学校の1年コースに入学。毎週日曜日に服作りの基礎を学んでいる。「将来は習得したトルコ語を生かせる、トルコのアパレルメーカー勤務を希望していますが、トルコでは服飾の仕事に就くこと自体が難しい。まずは基礎を学び、日本できちんと技術を身につけてからトルコに行きたいと思っています」

来年は半年間休学し、トルコの企業でインターンシップも経験したい、と夢を膨らませる。■

Chihiro Kazono
2010年東京外国語大学トルコ語専攻に入学。
ESSや大学生協の学生委員会「TuCoS」などで幅広く活躍中。
バタンナーを目指し、週末は服飾専門学校に通う。
空手初段(黒帯)。茨城県出身。



楽しいという
実感がなければ、
続けられない。

News

東外大のメンバーになった方々から一言いただきました



島田志津夫
Shizuo Shimada
大学院総合国際学研究院
国際社会部門(中央アジア地域) 特任講師

子どもの頃にテレビ番組で見たシルクロードの風景に魅せられ、中央アジアについて勉強したくて本学ペルシア語学科に進学しました。

ソ連崩壊前後の1990年代当時、日本では中央アジアについての情報は非常に限られており、数少ない情報から想像(妄想?)をめぐらすか、あるいは直接現地に行って情報を入手するかしありませんでした。その後、ウズベキスタンとタジキスタンで実際に生活する機会を得て、ウズベク語とタジク語を学び、自身の研究を進めてきました。

情報が氾濫する現代では、自分がほしい情報は瞬時に何でも手に入ります。目の前に答えがぱっと現れる。そのためか、最近の若い人たちはいろいろなことに想像をめぐらすことが少なくなったように感じます。国内で最初の中央アジア地域の専門課程で自分が教えるとは思ってもありませんでしたが、一般にはまだなじみの薄いこの地域について少しでも多く知ってもらうだけでなく、想像の翼を広げながら物事を探求する楽しさについても伝えることができたいと思っています。



田島充士
Atsushi Tajima
大学院総合国際学研究院
言語文化部門(心理学) 准教授

久しぶりに母校に戻ってきました。私は、異なる生活文脈・文化を背景として異なる見解を持つ者同士の対話可能性に関心をもち、心理学研究を進めてきました。このようなテーマにこढ़わり続けてきたのは、東外大での学びが大きく影響していたと思います。

外国語を学ぶということは、外国の事情に詳しくなると同時に、自国の文化についても自覚的に学び直し、両者を結びつけようとするプロセスを伴うものと言えます。多様なものの見方の存在に気づき、自分自身のものの見方も客観視する。東外大でこのような学びを体験できたことが、異文化間対話への関心を高めるきっかけになったと思います。

異文化間対話は、現代社会に生きる我々にとってもなお、達成困難な課題ではないのでしょうか。対立する見解を持つ当事者同士が、いかに対話を続けながら、お互いに納得のできる新たな世界観を生み出すことができるのか。そこに心理学はどのような貢献ができるのか。この困難なテーマについて、東外大で学びみなさんと共に、考えていきたいと思っています。



坂井真紀子
Makiko Sakai
大学院総合国際学研究院
国際社会部門(アフリカ地域) 特任講師

「アフリカに、何か学ぶことがあるの?」と問われることが、以前に比べれば少なくなりました。ただ貧しく援助が必要な存在としてのアフリカのイメージが、変わりつつあることを実感しています。実際、グローバルな動きの中で、先進国と途上国という従来の上下関係は流動化しています。新しい市場としてアフリカが注目されるとは、20年前には想像もしませんでした。今の時代に、本校にアフリカ地域専攻が作られたことの意味は大きいと思います。

3.11以降、私たちは、経済発展のみを目指す生き方そのものを問い直さざるを得ない現実を生きるようになりました。欧米発の既存の価値観を問い直し、さまざまな生き方や可能性に気づかせてもらえる場として、アフリカの持つ「生きる力」から学ぶことはたくさんあります。学生たちには、メディアが作る「貧しい」「危ない」といった固定的なイメージをカッコに入れて、手ぶらでアフリカに行ってほしい。その懐の深さ、あたたかさや強さにふれてほしい。私はその学びの入り口で、案内役を務められればと思います。

座右の銘

お天道様は
見ているぜ
(車寅次郎)

座右の銘

外国語を知らないものは、
自分の国語についても
何も知らない
(ゲーテ『格言と反省』から)

座右の銘

笑う門には
福来る

東京外国語大学出版会が
新刊2冊を発行

『ラテンアメリカにおける従属と発展
——グローバル化の歴史社会学』

本書は、1960年代にグローバル資本主義の特徴を分析した先駆的な研究として、いまなお世界で広く読み継がれるラテンアメリカ研究の古典です。1995年から2002年にかけてブラジル大統領を務めた

カルドーゾ氏の社会学者としての出発点となる著作であり、BRICsのめざましい成長と、昨今の反グローバリズム・反新自由主義の思想的背景を理解するための一冊です。解説: 恒川恵市(東大名誉教授)。



フェルナンド・
エンリケ・カルドーゾ/
エンソ・フアレット著
鈴木茂/受田宏之/
宮地隆廣 訳
2012年4月10日発行
四六判/上製/352頁
定価2,940円(税込)



床呂郁哉/
西井凉子/福島康博 編
2012年4月10日発行
A5判/上製/414頁
定価3,780円(税込)

『東南アジアのイスラーム』

東南アジアは、世界で最も多くのムスリム(イスラーム教徒)を抱える地域です。本書は、その東南アジアのイスラームについて、歴史的・文化的背景から政治や経済にいたるまで、総合的かつ多角

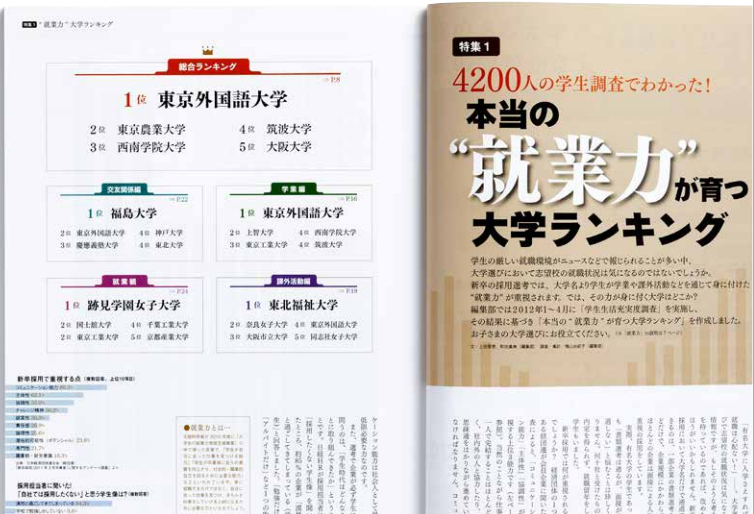
的に考察した論文集です。イスラーム研究の最新の成果として、研究者や専門家に限らず、昨今注目を集めている東南アジアやイスラームに関心のあるすべての人におすすめの一冊です。

「本当の“就業力”が育つ大学」
総合1位にランキング

「日経CAREER MAGAZINE “受験から就職まで 親と子のかしこい大学選び”」(日経HR、2012年6月11日)の特集「本当の“就業力”が育つ大学ランキング」で、昨年に引き続き本学が総合1位に輝きました。

就職活動中の学生に対し「学業」「課外活動」「交友関係」「就業観」についてアンケートが行わ

れ算出されたランキングで、本学は「学業」では1位、「交友関係」「課外活動」においても上位に位置する結果となりました。



「就業力」とは、
自分に適した仕事を見つけ、
継続して仕事ができる
力のこと。



東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

〈編集後記〉2学部体制になったキャンパスで、果たして学生諸君はどんな表情で毎日を送っているのだろうか。組織の変化はそこで学ぶ若者たちにも変化をもたらさだろうか。そんな好奇心からキャンパスの定点観測を試みた。結果は巻頭特集「今日の自分が明日の世界をつくる」でご覧いただけるとおり、新入生も、そして以前からいる諸君も、とてもいい表情をしている。それが何よりの希望だ(編集子)。

GLOBE Vaire
グローバルフェイス

2012 Number 6
The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies

2012年10月発行

発行 東京外国語大学

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

総務企画課広報係

編集 広報マネジメント室

編集協力 日経BPCコンサルティング

印刷 大丸グラフィックス

アートディレクション 大銅健二

表紙撮影 市橋織江

デザイン 茂谷淑恵(大銅デザインサイト)

©東京外国語大学2012

本誌記事・写真・イラストなどの無断転載を禁じます。